

バシュラールの詩学

法政大学出版局



バ
シ
ュ
ラ
ー
ル
の
詩
学

及
川
馥

法
政
大
学
出
版
局

著者略歴

及川 馥 (おいかわ かおる)

1932年宮城県生。東北大学大学院文学研究科博士課程修了。仏文学専攻。茨城大学人文学部教授。訳書：セール『生成』『離脱の寓話』『パラジット』(共訳)、トドロフ『はかない幸福ールソー』、『他者の記号学』『象徴の理論』(ともに共訳)、ヴェーバー『テーマ批評とは何か』、バシュラール『大地と意志の夢想』『夢想の詩学』『科学的精神の形成』ほか。

バシュラールの詩学

1989年3月10日 初版第1刷発行

著 者 © 及 川 馥

発行所 財団 法人 法政大学出版局

〒102 東京都千代田区富士見2-17-1
振替 東京6-95814 電話(03)237-1731
印刷/KMS 製本/鈴木製本所

ISBN4-588-13010-2

はじめに

ガストン・バシュラールはフランスの科学史研究、エピステモロジー研究の第一人者であったし、かつまた詩^{ポエティック}学の中心をなすイマーシュ研究の一大源流となったことはすでに広く知られていることであろう。しかしこの両立しがたい分野で同時に活躍したことには、両方の陣営から奇異の目を向けられたし、いくつかの批判や誤解まで生み出したのである。いったいバシュラールの内部ではその両者はどのように位置づけられていたのだろうか。

「ポエジーの軸と科学の軸はまず逆になっている。哲学が望みうることはせいぜいポエジーと科学を相補的にすること」であると『火の精神分析』で述べているように、まずかれの哲学は人間の創造的な思考を総括的にとらえようとしていたのである。その場合、自然科学的思考ではできるだけイマーシュが排除されて抽象化され、数式的表現が目標となるのに対し、逆方向のポエジーにおいてはまさにイマーシュが生命となり、具体的表現が目ざされることが特徴なのである。

この特異な思想家はシャンパーニュの田舎の高校^{コレージュ}を卒業したあと、パリの郵便局につとめながら、数学の学士号をとり、郷里の母校で物理、化学を教え、さらに哲学教授資格をとるというように変則的なコースをたどり、ディジョン大学教授を経てソルボンヌの科学史・科学哲学の教授となった。このような経歴からも推察されるように、かれのイマーシュ観は科学史の研究のなから生じたといえよう。

十七・八世紀の自然科学発展の歴史をたどれば、現在ではとうてい信じられないようなイマージュが説明原理として大手をふって通用していたことが分かる。客観的認識を阻害するイマージュ群から精神はどのようにして解放されるべきかを意図しつつ『科学的精神の形成』が書かれたのだが、これは逆にイマージュが人間の思考にいかに関根をおろし、いかに強力に作用するかの実例集とも読めるのである。

バシュラールのあげるイマージュ形成の最大の原因は、個人の最初の経験つまり第一印象であり、また俗説や通念である。こうしたイマージュが心中に根を張ることの説明原理には、実体論、實在論、アニミスム、リビドーがあげられる。つまり人びとに大きな影響力をもったイマージュにはこのような原理が感情的な価値を付与しているのである。

バシュラールはこうしたイマージュの考察に早くから精神分析の視点を導入しているが、性的なものにコンプレックスを限定せず、プロメテウス・コンプレックスからホフマン・コンプレックスまで、さまざまな文化コンプレックスを想定する。それはかれの考えるイマージュが、意識と下部意識の接点に位置づけられ、意識に影響をあたえる何物かによって形成されるものだからである。

やがてかれは、抽象化に根強く抵抗する人間の心的現象を、科学的思考の障害とする限定された視点から離れて、人間の思考の総体的把握という観点から肯定的に理解しようとするのである。ユングの考えに共鳴し、またドゾワイユの覚醒夢の方法を知り、本腰を入れて想像力を検討し、誤謬の原因として貶められていた想像力を積極的に復権させようと考えるようになる。

さらに想像力を、たんにイマージュの再現力として静止的に捉えるのではなく、イマージュを変形する能力とみなし、イマージュに力動性をあたえる能力とする。そのためには形相因より質料因を、つまり、

形体より物質を重視しなければならないという自覺に達する。

イマジニを地水火風というアリストテレス的質料因によって分類するなら、主觀の變幻無比な作用によると思われる想像力も、客觀的存在たる質料を媒介にしてその本質を明らかにするのはないか。このような想定のもとに、バシユラールはこの質料（物質）的想像力の实例を、西ヨーロッパはもとより、北歐、アフリカ、インド、中国の、文学、伝説、神話、はては人類学の報告まで渉猟し、『火の精神分析』のあと、残る三大元素をめぐって『水と夢』、『大氣と夢』、『大地と意志の夢想』、『大地と休息の夢想』を完成したのである。

バシユラールはこのあとさらに考察を深め、質料的想像力ではまだ客觀性にとられすぎていたと反省し、現象学的方法によつてもう一度イマジニの生命を捉えようとする。質料はもちろん情念や欲求の圧力から解放された（純粹昇華）としての詩的イマジニをあるがままに捕捉しようとしたのである。

このようなバシユラールの現象学的なイマジニ論は、自我の壁をのりこえる方策を示唆する点でも注目にあたいするが、かれ自身も認めるようなアニムス側からの検討も必要であろう。また、イマジニの發生論的研究や、感覺とイマジニ、思考とイマジニ、ことばとイマジニといったエキサイティングな課題も残されたままである。一方、人間の理解のために想像力を意識のはたらきの中心において考える必要は、現代においてますます強くなっている。その点、文学や科学といった区別をこえた想像力についてのバシユラールの考えには、貴重な解明の手がかりが隠されているように思われる。

本書の第一部第一章では、バシユラールの思想の形成と發展をかれの著作を追いつながら概観した。かれ

の科学的認識論つまりエピステモロジーの最大の関心事に、新しい原理発見のメカニズムの探求をあげる
ことができる。既成の幾何学の原理に対し「ヘノン」ということによって非ユークリッド幾何学が成立した
事情はバシユラールにきわめて大きな示唆をあたえたのである。対象の全面否定ではなく、既成の原理を
包括する新しい視座や体系の設定を意味するこの「ヘノン」をキー概念として、バシユラールのエピステモ
ロジーを見ることが出来る。

またそれと同時に、技術的革新と手をたずさえて推進される科学的探究における仮説の重要性、いわば
観念的な操作についての価値の見なおしも、バシユラールの大きな功績としてあげなければならぬ。

このような科学的認識論や科学史の研究に並行して刊行された想像力やイマージュを論じる著作のなか
からも、新しさや独創性への関心は読みとることが出来る。ポエジーとは新しい言語表現、新しいイマ
ージュの表現を最大の特色としているとバシユラールは考えており、既成の表現にノンという点で、かれの
エピステモロジーのひとつの根に結びつく可能性はないだろうか。このような関心をもって両分野を概観
したのである。

第二章は、バシユラールの詩学の中心課題であるイマージュの構造を論じたものである。とくにその物
質（質料）的想像力が着想されたプロセスを詳しく追ひ、形相から資料への移行を跡づけ、イマージュの
文学的機能について考察した。

第三章では、バシユラールの基本的な分析方法である精神分析の問題をフロイトとユングのかかわりと
いう点から論じた。文化コンプレックスの形成や、隠喩から現実へという原始心性やユングの元型などに
ついてバシユラールの考え方をまとめてみたものである。

第四章は、現象学への接近がいかなる方法的な反省によってなされたかを示し、現実機能に匹敵する非現実機能の価値やアニムスとアニマ、主観の四声構造、夢想の核としての幼少時代というような問題を扱った。

第二部は、もっぱら『水と夢』の分析にあてられる。なんといっても物質的想像力はバシュラールの詩学の基本的な原理といえるものであり、その構造の詳細を明らかにすることが必要だからである。第一部とかなり重複する箇所もあるが、エピステモロジーにおいて、客観的対象認識の障害とみなされた〈実体〉という概念を鍵として水のイマーシュをとらえなおし、水が人間の精神生活といかに深いかかわりをもつかということを示したバシュラールの考え方を整理したものである。最後に、音韻のレベルでのアナロジイという詩的言語の構造にもふれた。

なお、一般に詩学といえば作詩法に代表されるような形式や技法について、バシュラールはまったく考慮していないことも付記しておこう。

結局、本書の中心をなすテーマは、バシュラールのイマーシュであり、その詩学である、バシュラールは文学書を二度読む。一度目は筋を追ひ、二度目はイマーシュを求めて。それほど、かれはイマーシュを好み、イマーシュを文学、とくにポエジーの中心にすえている。したがって、物質的想像力においても、また晩年の現象学的方法においても、その関心の対象はつねにイマーシュである。その意味で、本書もイマーシュの詩学なのだといえよう。

バシュラールの詩学——目次

はじめに iii

第一部 イマージュの詩学

第一章 バシュラール——生涯と思想 2

第二章 イマージュ論 59

第三章 二つの精神分析をめぐって 80

第四章 夢想の詩学へ 107

第二部 『水と夢』——物質的想像力

第一章 水の反映と物質性 130

第二章 水における愛と死と物質 171

第三章 水のモラル——純粋性と浄化作用

第四章 水のパロール——音韻の詩学 217

あとがき

初出一覧

参考文献

250

253

(巻末)

第一部
イマージュの詩学

第一章 バッシュラール——生涯と思想

「ひとりの人間が人間であるのは、超人になる割合に応じてである」とバッシュラールは『水と夢』のなかで述べている。もちろんかれはここでニーチェ流の超人を想定しているのではない。人間にあたえられたさまざまな条件、障害を真剣に克服することによって、人間はほんものの人間になっていくのだし、克服のための努力にはまさに通常の人間の限界をこえるようなきびしさが必要なのだという意味で述べているのである。

「人間は、人間の条件をのりこえよ、というふうに人間をつき動かす諸傾向の総体として規定されるべきだ」とかれはつけ加えている。だからバッシュラールの超人は人間の背丈をしている、ともいえないことはない。ただしこれは、人間の条件をのりこえることは並大抵のことではできないということを、身にしみて知っている人間のことばなのだ。このような信条をみずからに実践課題として課し、とくに苦しい顔もせず、むしろ楽しげに取り組むひとりの哲学者の姿を想像すると、それはバッシュラール自身の姿と二重うつしになってくるであらう。

しかし、フランスの科学思想家として画期的な業績を残し、戦後思想の一大潮流ともいえるべき構造主義の源泉となったバッシュラールも、学者としての頭角を現わすにはもつとも劣悪な条件のもとにおかれてい

た。学歴の点で、また家庭生活の点で、さまざまな障害に遭遇し、それらを克服しながら、かれは学問的にも人間性の面でも大きく成長していったのである。かれはひとりのシジフォスであった。しかし転落した岩をあたかもサッカーボールを追いかけるように追いかける颯爽たるシジフォスなのである。

I 形成期

逆境にあつてもくじけぬ強靱な意志と、それを支える頑健な肉体と、そして人生へのいつも変わらぬすこやかな愛情とが豊かな感受性とともにかれにはあたえられていた。そして世界はまずかれの故郷シャンパーニュ地方のなだらかな丘のふもと小さな町パール・シユル・オーブで、その肥沃な野と清らかな小川と柔らかな緑の森という豊かな自然としてかれにあたえられたのである。

かれの祖父は靴造りの職人であつた。両親は新聞とタバコの小売店をもっていた。父親が暖炉に手ぎわよく火を燃やすのを見ながらガストン少年は、いつか父のように巧みに火をおこしてみたいというプロメテウスのなコンプレックスをいだいたのであつた。かれはこの父からおそらく物理や化学の実験における手先の器用さを受けついたのであろう。あるいは妻を亡くして以後、娘シザンヌを育てながらの学究生活において家事、とくにその料理についての腕前なども父親から受けついたのであろうか。

バシュラールは母について、あるいは妻についてもまったく著作の中でふれることはなかった。精神分析を学んでいながら、あるいはそれゆえに、自己の夢について語ることは慎重であつた。むしろ愛について、あるいはまた人生の暗い面について、文章にすることはみずから禁じていたと思われるふしがある。

そういう点ではかれの向日性^{トロピスム}とでも名づけられそうな性向は固い信念に裏づけられている。

バシュラールの個人的生活の面では、日記とか書簡集とかが公刊されれば、かれの内面と外界のドラマも明らかに、かれの豊かな人間性がさらに深く知られることになるうが、われわれは今のところ表面的な略歴をたどることしかできない。

一八八四年六月二七日生れ。小説家のデュアメル、批評家ジャン・ポーラン、詩人のシュペルヴィエルと同年であり、ベルクソンより二五歳、アランより一六歳若く、サルトルよりは二一歳年長である。この年はユ伊斯マンズの『さかしま』、ヴェルレーヌの『昔と近頃』、ルコント・ド・リールの『悲劇詩篇』が刊行された年であり、わが国の明治一八年にあたり、日本人類学会が創立された年にあたる。

故郷で中等教育をおえたバシュラール青年は一九〇二年エペルネ近郊の小村セザンヌ^{コレージュ}の高等中学で復習教師となる。翌年たまたま試験を受けたところ、ヴォージュ県ルミルモンという人口一万ほどの町の郵便電報局雇員として採用され、一九〇五年まで勤務し、その後二年間は電信兵として兵役につく。そのあと一九〇七年から一九一三年までパリの郵便電報局職員としてはたらくが、東駅構内勤務であった。その間にパリ大学の夜学で勉強を続け一九一二年数学の学士号を取得した。その年電気通信上級学校三年に編入された。そして一九一三年から一九一四年までは電報技師研修員試験準備のため休職となり、聖ルイ高等中学校内の特別数学クラス給費生となった。これはおそらくすべて試験によってごく少数選抜されるものであり、バシュラールは電報局ではたらくながら勉強したのである。

一九一四年七月八日、三〇歳のバシュラールは故郷の若い女教師と結婚するが、一カ月もたたぬうちに第一次大戦の勃発をみ、八月二日応召、一九一九年三月一六日帰還。その間三八カ月の塹壕生活をおくった。

戦功十字勲章のほか、師団感状を受けている。

一九一九年、母校の高等中学^{コレージュ}で物理と化学の教師となることができた。平和な生活をむかえ、娘のシュザンヌをもうけたのは良かったが、翌二〇年の六月には妻が不帰の客となってしまふ。しかしこの年、バシュラールは哲学の学士号を取得している。教師をしながらさらに哲学の研究をつづけ、一九二二年、哲学教授資格試験にみごと合格したのである。バシュラールは三八歳であった。

バシュラールの正規の学校教育は中等教育で終わり、そのあとの勉強や研究には少数の学者による指導を受けたとしても、ほとんど独学同然であったといえよう。それは多くのマイナスをかれにもたらしたにちがいない。しかしバシュラールはそれをプラスに変え、知識を集め組織だてる独自の手法を編みだしていく。そしてそこに、かれの研究の非凡な着想と、既成の学問領域にとらわれぬ自由で力動的な思考の秘密もあるように思われる。

普通の高等教員よりは一〇歳以上もおくれて獲得した教授資格であるが、この新しい哲学教授はそのあとも母校の高等中学で物理や化学の実験を教えつづけたという。その間に科学の認識の問題を研究し、一九二七年にはパリ大学に学位論文『近似的認識試論』を提出し、アベル・レー、レオン・ブランシュヴィック両教授の審査を経て文学博士となったのである。

そのときの副論文は『物理学の一問題の進化についての研究——固体における熱伝導』であった。

バシュラールの自然科学観の基礎をきづくこのミニユマンタルな『近似的認識試論』は、科学的認識が実在を一挙に把握するのではなく、修正と検証をかさねて漸進的に精密さを増加させ、誤差を意識しつつ

あたうかぎり実在に接近していくことの意味を多面的に考察したものである。次に、同書に付せられた豊田彰氏の解説をもとに紹介しよう。

第一部は、「認識とは再発見のため記述である」という一文で始まり、認識はディスクリールの次元でとらえられ、対象全体の認識と細部の認識の關係が追求される。つまり、細部の認識がまず述語部分として取り上げられ、主語を変化させ、属性が客観的な質として規定されていくプロセスが論じられる。

第二部は、実験科学における測定とは新しい言語による記述だと規定し、第一部の延長上に問題を設定する。現代物理学には「ひとが測定するところのものが存在し、測定の精度が上るにつれて認識が前進する」という暗黙の仮定が存在することに光をあてる。しかも大ききのオーダーにしたがって考え「無視しうる量は無視する」ことが重要な意味をもつことが指摘される。ついで法則の単純さと真理性、近似的認識と決定論との關係、認識と技術の相互作用（技術は科学に自信をあたえ安定させるといふ評価があたえられる）が考察される。

第三部は、数学における近似の問題。直観がいかに誤りやすく、認識の障害となり、それに対し近似がいかに重要な役割をもつか、多くの例によって示される。無限大と否定、連続と不連続、無理数や超越数など数学の重要概念も、近似という考え方と密接な関連のもとに導入されることが論じられる。

第四部は、客観性、実在、検証という概念の内容の検討にあてられ、認識の二つの力動的契機は、説明領域の体系的組織化の努力とそれとたえざる修正の努力にあり、修正や検証を可能にする誤謬こそ認識の起動力であることが喝破される。（誤謬の心理的原因についてはやがて『科学的精神の形成』において説明

されることになる。)

結局、近似論的というなら、自然科学における対象といえども「諸限定の集中する想像上の中心」にすぎず、「対象は観念から任意のどれだけ離れた位置におかれていたとしても、観念に内在している」のであり、実在は近似的認識の目標とする極であり、認識過程の極限であり、アベル・レーのいうように「客観性とは経験の合理的な極限」ということになる。しかも対象の質が固定されるのはつねに他のものとの関係によってであり、この関係を正確に精密にとらえるのが科学であるというレーの考えをふまえ、バシユラールはつぎのようにいう。

「世界はわが検証である。精神が試験ずみの観念によってつくられるのに対し、世界は検証された概念によってつくられる。」

結論として、修正と近似の関係が論じられ、たえざる修正は思考から異常さや偶然性をはぎとっていくが、近似的認識はそれ自体の不充足を意識しているからこそ、進歩に対して開かれ、慎重で、生産的で、真に合理的な客観化をおこなうのだ、というふうに結ばれる。

なお、かれは相対論を従来の「測定の原理そのものを破壊する超越論的な検証」の理論とみなし、この本で扱うことを慎重にさせているが、そのことはすでに相対論を独自に論ずる用意のあることを感じさせる。

副論文『物理学の一問題の進化について』⁽¹⁾は、「固体における熱の伝導」という副題が示すような現象を扱った科学史的色彩の濃い論文であるが、すでに数学的な物理学をもっとも中心的な科学とみなすバシ